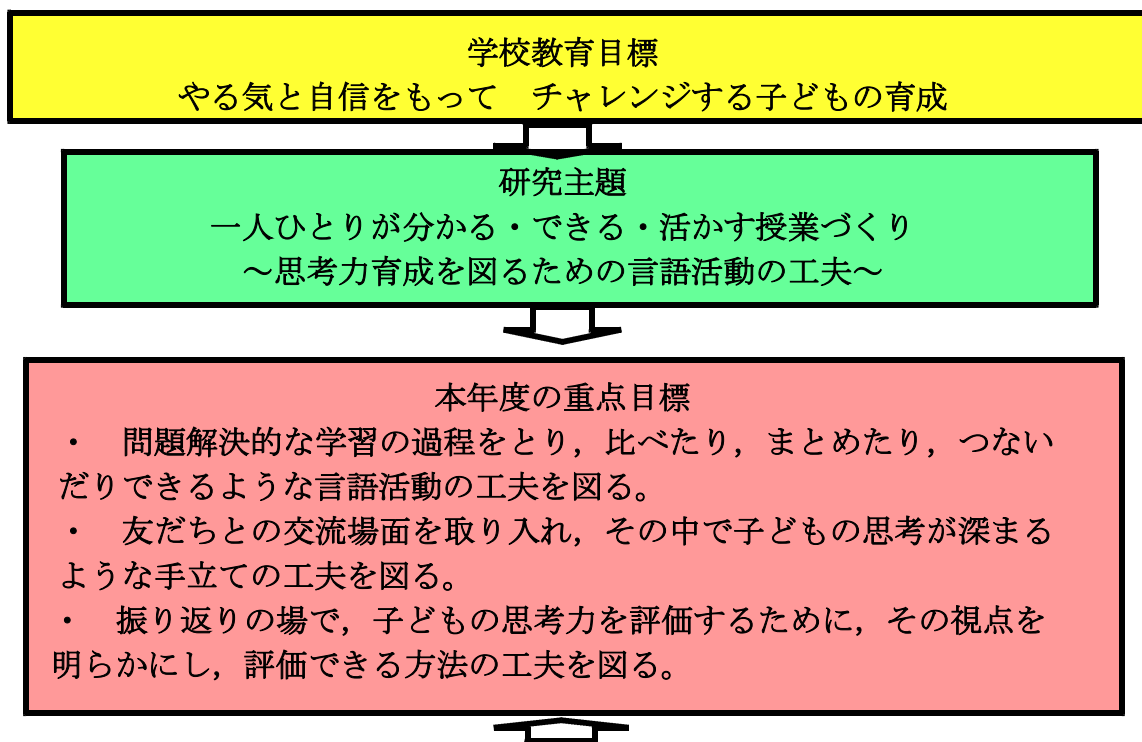
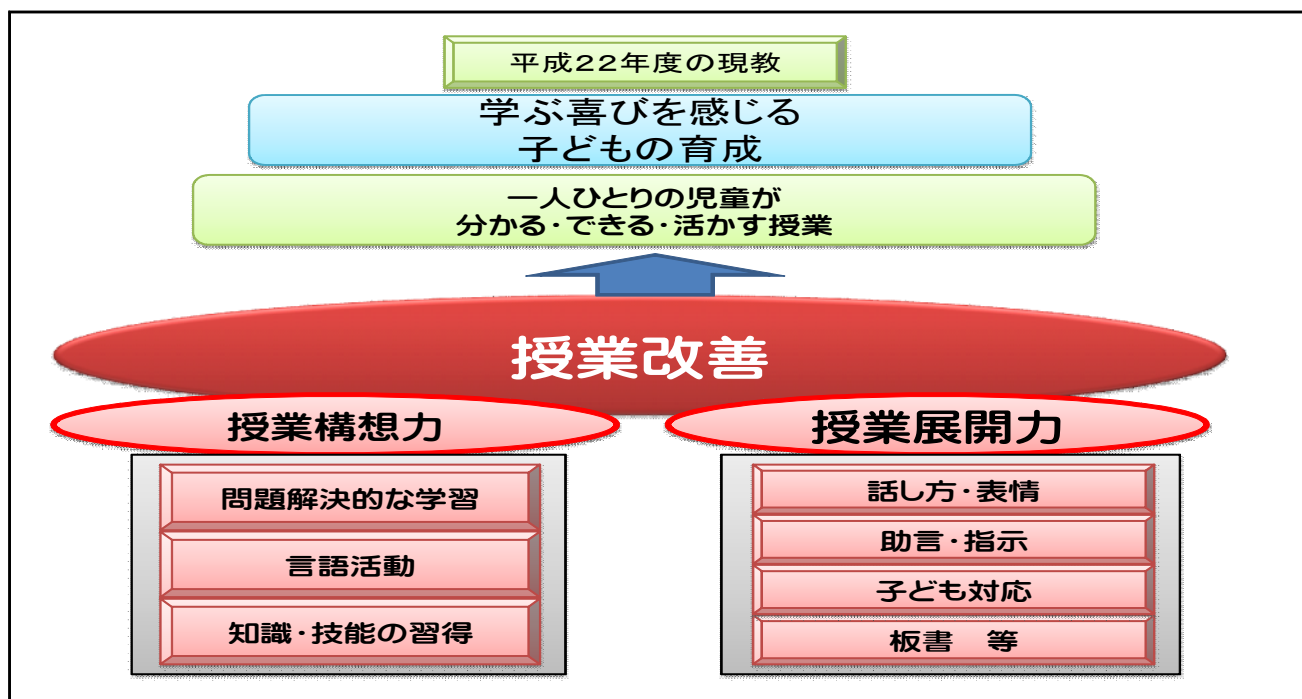


校内現職教育



1 主題設定の理由

(1) 昨年度の取り組みから



昨年度は、教師一人ひとりが分かる・できる・活かす授業をめざし、自己の課題を明確にし、授業改善の視点に則って、見通しをもって授業研究に取り組むことで、授業力が高まるという研究仮説の上に立って研究を進めてきた。

授業改善の視点を授業構想力と授業展開力ととらえ、この2つが両輪となって動き出すとき、授業は変わってくると考えた。授業構想力の三つの中から個人の課題と照らし合わせて研究したいところを選択し、三つの部会を発足した。また、授業展開力としては、一人ひとりの教員が自分の課題を明確にして授業改

善にあたることとした。

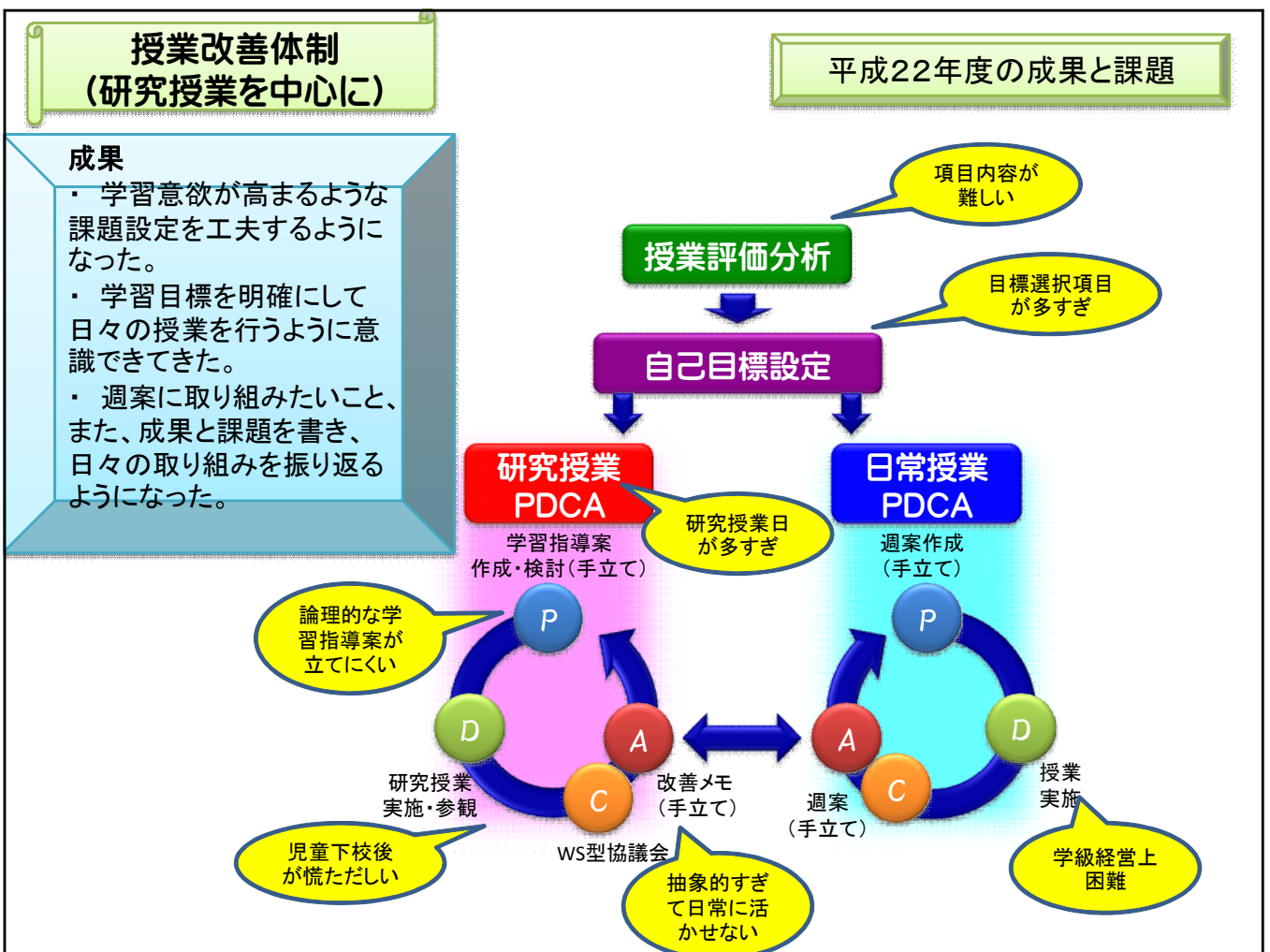
部会を中心に、授業改善の視点として大切にしたいことを次のようにまとめた。

- ① 問題解決的な学習の充実を図るために
 - ・ 問題意識を喚起，継続するような学習課題の設定の工夫
 - ・ 単元全体を通して，また一単位時間において学習の見通しがもてるような方策，手立て
 - ・ 交流の場，ふり返りの場の保障
- ② 言語活動の充実を図るために
 - ・ 各教科の基礎的・基本的な事項や概念をきちんと使った言語活動
 - ・ 目的意識・相手意識，場面や条件を考えた上での言語活動場面の設定
- ③ 基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る工夫とは
 - ・ 効果的な繰り返し場面の設定
 - ・ インパクト，印象深い学び
 - ・ 子どもの生活や経験と結びつける工夫

学習指導要領で教育の効果を高める事項として掲げられた三つの点であるが，昨年度はそれらのつながりを上手く見出すことができなかった。

そこで，今年度は三つの視点を置くのではなく，共通の視点として一つに決めて，昨年度それぞれの部会で大切にしたい視点をうまく踏襲しながら今年度の研究に引き継いでいきたいと考える。

また，授業改善を図る手立てとして，PDCAサイクルを活かした研究授業の取り組みを行ったことも意義深い。その取り組みによって，個の教師力が高まるとともに学ぶ喜びを感じる子どもの育成をめざした授業のあり方を検証できるのではないかという仮説の上に立った実践であった。下図のような成果と課題が見られる。



確かに，個々の教員の授業改善に向けての士気は高まってきている。しかし，自分の課題がはっきりと認

識し切れなかったり、学級経営での問題を抱え、授業の中で目標としたことがうまく実践しきれなかったりする実態も見られる。

また、指導案作成においても、部会としての検討機能が十分発揮できていたとは言い切れない。このような点の改善を図って、今年度の研究を進めていく必要があると感じた。

(2) 児童の実態から

本年度の学習状況調査の結果から本校の児童は次のような点に課題が見られる。

- 国語
 - ・ インタビューを聞いてよいところを選ぶ
 - ・ 文章・ポスターをもとに自分の考えを書く
- 算数
 - ・ 言葉や式、図を使って訳を説明する
- 理科
 - ・ 豆電球が付かないわけを書く
 - ・ 腕を曲げた筋肉の動き方を説明する

このように、習得した知識・技能を活用し、課題を解決するために言葉を使って説明する力が課題である。つまり、基礎的・基本的な知識・技能を活用するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力をはぐくむことである。もちろん、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得することもおろそかにはできない。習得と活用を関連づけた学習指導過程の工夫や主体的に取り組む学習活動の充実を図るためにも、本校では、言語活動の充実を図りながら思考力を高めることが最も求められているように考える。

そこで、今年度は次のように研究主題を設定し、授業改善を焦点化し、取り組みたいと考える。

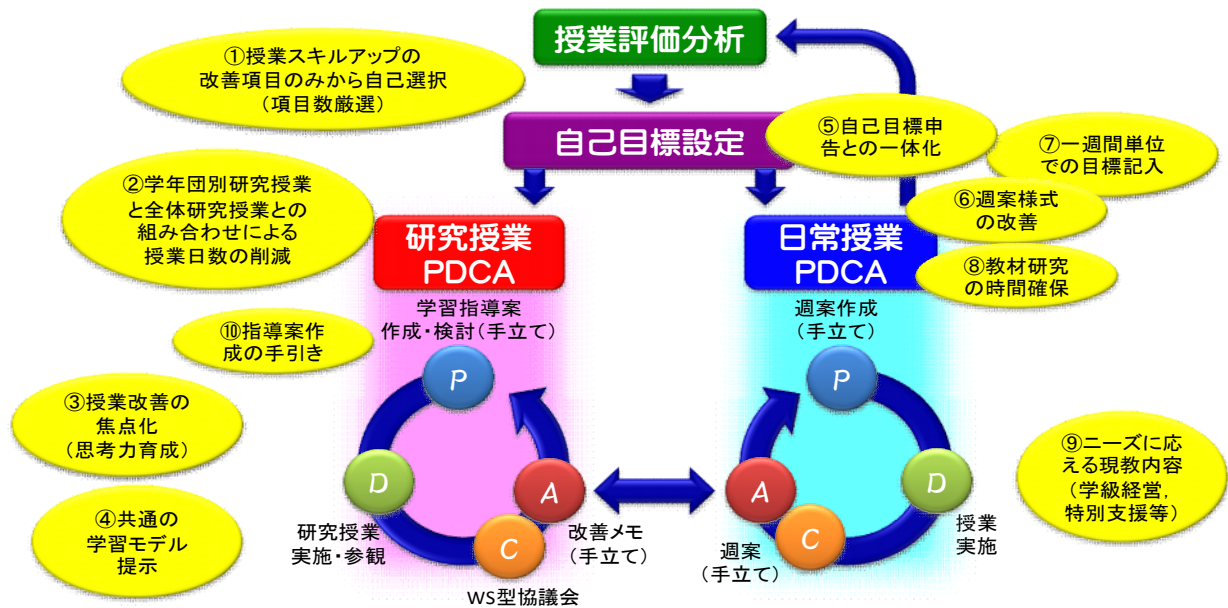


問題解決的な学習の充実が子どもたちの意欲の喚起にとって、とても有効であり、思考力を高める学習として成立できる要因を合わせ持つと実感できた昨年度の成果を活かし、問題解決的な学習の形態をとりつつ、言語活動の展開を工夫していきたい。基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視した上で、言語活動を工夫しながら知識・技能を活用する学習活動へどうつないでいくかがポイントである。このような学習を展開していくことによって知識・技能をより確かなものとするという面も持ち合わせている。

また、本年度も、研究への取り組みが継続的、日常的な実践につながるためにPDCAサイクルを活かした授業研究を行いたい。昨年度の反省を活かし、次のように改善を図った。

授業改善体制 (研究授業を中心に)

平成23年度



2 主題について

「言語活動の工夫」とは

国語科の学習指導との関連を図り、言語活動を適切に組み込んでいくことが学習の基盤としての思考力、判断力表現力その他の能力の育成につながると思う。

本年度も昨年度に引き続き、研究教科を国語科、算数科に絞って授業研究を進めていきたい。国語科、算数科における言語活動例は次のように示されている。

国語科…話すこと・聞くこと、書くこと、読むことのそれぞれに記録、要約、説明、論述など。



対話、記録、報告、要約、説明、感想等の活動

算数科…「三角形、平行四辺形、ひし形及び台形の面積の求め方を具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして考え、説明する」と言った算数的活動の充実



言葉、数、式、図、表、グラフを用いて説明し合う活動

つまり、比べる、まとめる、つなげるという思考操作を必要とする活動をどのように行わせるかがポイントとなってくる。具体的な言語活動の形態を工夫することで思考力、判断力、表現力その他の能力が育つことになるととらえ、研究を進めていく。

3 研究内容

(1) 研究仮説

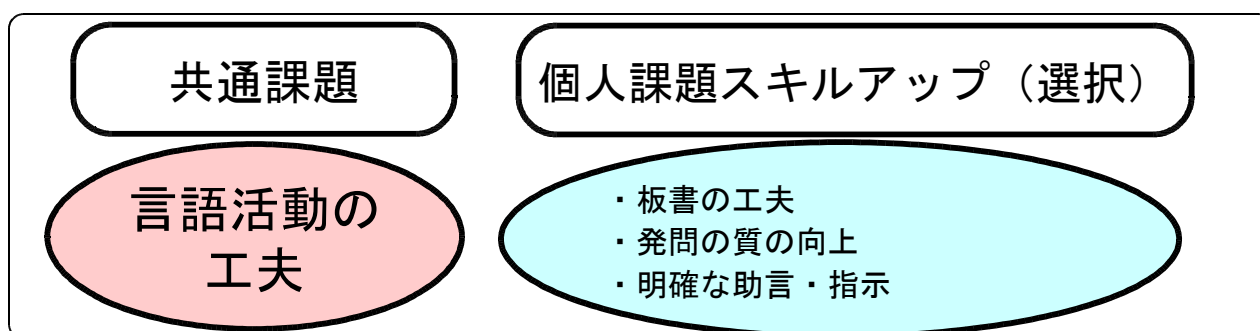
- ① 比べたり、まとめたり、つないだりするような具体的な方法を使って問題解決をしていくことによって思考力が育つであろう。
- ② 全体交流の場で、教師が焦点化した発問をすることで本時のねらいにせまることができるだろう。
- ③ 振り返りの場で、学習したことを日常生活の場面にあてはめて考えさせたり、具体的なキーワー

ドを与えて振り返りを書かせたりすることで、学んだことを再構成して考えようとする力が高まるだろう。

(2) 研究仮説を受けて

- ① 比べたり、まとめたり、つないだりするような思考を生み出す言語活動として、どのようなものを準備するのかを、自己解決場面、集団解決場面において具体的に考えていく。この時、大切にすべきことは、この時間で子どもたちにどんな力をつけたいかの分析をしっかり行い、ねらいを達成するために有効な言語活動を考えておくことであり、それが思考操作を伴うものかどうかの見極めをしっかり行っておく必要がある。
- ② ペア対話やグループ交流で見出した考えを全体交流の場で発表し合うだけでは、子どもたちの思考は深まらない。集団解決場面における全体交流で子どもたちを共通の思考の場に立たせるためには、本時のねらいにせまる中心発問を考え、教師がどのタイミングでどんな発問をすればよいのかを考えておく必要がある。
- ③ 振り返りの場で、子どもたちの思考力を評価するためには、それを見取るための視点、評価基準を明確にしておく必要がある。また、振り返りの場で、思考力や本時の学びの成果を見取るために、何を子どもたちに書かせるかも考えておかなければならない。例えば、学習したことを日常の生活の場面に当てはめて考えさせたり、「もし」「例えば」などの具体的なキーワードを与えて振り返りを書かせたりすることで、子どもたちは振り返りを自分の言葉で書きながら、自分の学びを再構成して考えることができる。

4 研究の方向



研究授業P D C A ・ 日常授業P D C Aを通して

5 研究方法

(1) 研究の進め方

- ① P D C Aサイクルが円滑に機能するために、自分の授業を振り返り、課題を見つける自己評価、他者評価を交え、次の三つの方向から分析を試みる。
 - ・ 普段の授業での子どもたちの反応
 - ・ 授業参観後に実施した子どもたちへのアンケート、保護者へのアンケート結果
 - ・ 授業自己チェックシート自分の授業におけるどの力（・授業構想力 ・授業展開力 ・授業評価力）に課題があるか、またどの学習過程（・課題把握 ・見通し ・自己解決 ・集団解決 ・評価）に課題がみられるのかを明らかにするためにも分析を試みる。
なお、今年度の授業スキルアップ課題は、昨年度教員の関心が高かった次の三点から自己選択するこ

とした。

- ・ 板書の工夫
- ・ 発問の質の向上
- ・ 明確な助言・指示

② 授業改善の視点を明らかにした研究授業

昨年度の反省を活かし、部会が授業検討機能を十分発揮でき、日常の授業に活かしやすくなるような体制を考えた。低・中・高学年団で組織した部会である。本年度も、授業後の改善策を協議し、それを自分の日々の授業に活かしていくことがねらいとなっている。自分の課題はどうであるかを明らかにした上で授業を行い、より具体的に改善策が出せるように、指導案も主張点がはっきりと分かる形を取りたい。また、発達段階が同じと判断できる学年部会であるので、自分ならどのような単元でどのように授業を進めるといふ具体的な視点で授業を検討することができる良さもある。

③ 共通の学習モデルの提示

授業改善に向けて、どのように単元の展開を考えればよいのか、また、どのような一単位時間の流れを考えればよいのかのモデルを示すことで全教員が一つの方向性のもとで研究を進めていくことができる。もちろん、そこから自分なりのアレンジがあって当然であるが、問題解決的な学習の過程を大切に、言語活動の工夫を試みた授業モデルである。授業を構想していく上で、研究仮説に示した三点を大切に考えたい。

④ 全員参加の研究協議

全体での協議では、なかなか全教員の意見が反映されにくい。そこで、ワークショップ型の協議会を取り入れることとする。また、研究協議が以後の授業改善につながるためにも、本時の改善策を中心に話し合う場としたい。そこで、授業者は改善した指導案を構想したり、参観者は授業から学んだことを具体的に自分の実践に当てはめて考え、まとめていき、日々の実践に活かすことができるようにしたい。

⑤ 言語化による学びの明確化

今年度の取り組みを通して一人ひとりの教師が自分の学びのポートフォリオができあがる。これは、学んだことを言語化して残し、それを次の自分の実践に活かすための手法である。1年間で、思考力を高めるような言語活動の充実を図る学習とはどんなものか、また、自分の授業スキルアップ課題について、多くのことを学び得るであろう。一人ひとりの学びを一つにまとめることで、学校として、学ぶ喜びを味わわせる授業づくりのポイントが見えてくると考える。

⑥ ニーズに応える研修内容

昨年度の反省を活かし、授業研究だけでなく、もっと幅広く研修をしたいという要望が挙がった。そこで、学級経営や発達障害児を含む学級での指導力の向上を目指した演習や特別支援教育や危機対応力についてなどの講話を取り入れたい。

また、指導案をどのように作っていくのかを解説する授業スキル向上、授業構成力向上についての講話や学習評価力の向上を目指しての演習など幅広く取り組んでいきたい。

